

「三六災害」は、どんな災害だったのか？

－ 私たちは、河川の氾濫や土石流の跡地に住んでいる－

1 50年まえ、「三六災害」があった。

私たちが住む伊那谷は、西に中央アルプス、東に南アルプスに囲まれた美しい自然豊かな地域です。しかし、ときに美しい自然は、猛威を振ることがあります。50年前の昭和36年（1961年）、台風の接近と梅雨前線の停滞による激しい雨が伊那谷を襲い、伊那谷の各地で川の氾濫、土石流、地すべりが発生しました。何十年に一度か百年に一度くらいにしか起きないといわれるほどの大災害となりました。家や田畑が土石流に押し流され、集落ごと水びたしになったり、土石流とともに無くなったりした集落もあります。三六災害による死者・行方不明者は130名、家屋の全壊・流失・半壊は1,500戸にも及びました。

伊那谷は、もともと災害が起こりやすい場所でもあります。美しい自然に囲まれたふるさとを大切にするためにも、過去に起こった災害のことを忘れず、普段からしっかり災害に備えておくことが大切です。



写真 土石流に埋まった集落（大鹿村北川）



写真 天竜川が氾濫した様子
（飯田市阿島橋上空から上流を望む）

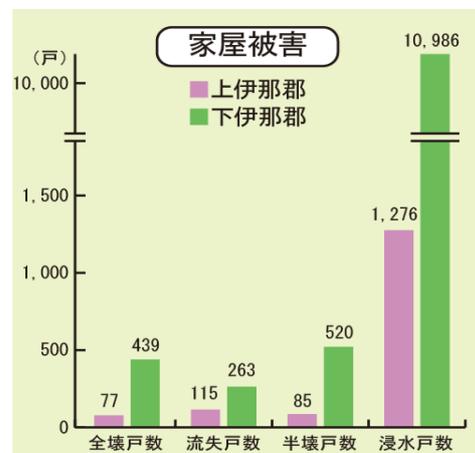
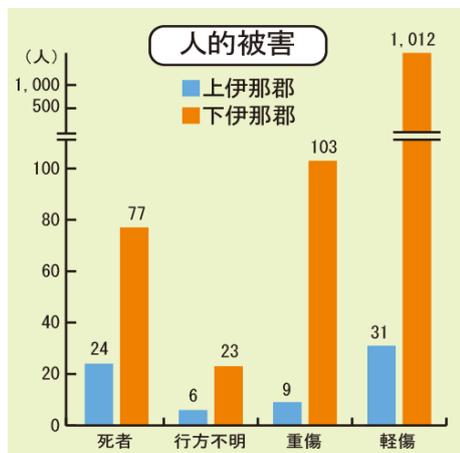


図 三六災害による伊那谷での被害（出典：天竜川サイエンス）

2 三六災害はどのように発生したか？

三六災害は、梅雨終盤の豪雨が引き金となりました。台風の接近と梅雨前線の停滞により、飯田観測所では総雨量 579mm を記録しました。特に、6月27日の降水量は 325mm に達しました。1週間で1年間に降る雨量の3割を超える、まさに「豪雨」となりました。

三六災害による被害が大きくなったのは、豪雨以外にも、伊那谷のもともとの自然環境の特性が要因として挙げられます。

伊那谷は、高い急峻な山々に囲まれ、気象条件によっては集中的に雨が降りやすい地形であること、また、中央構造線などの断層が多く、さらに、風化しやすい花崗岩など地質的に崩れやすい地域という特性も持っています。

そのような特性を持つ谷あいには、集落や農耕地が広がっているため、被害がより大きくなりました。

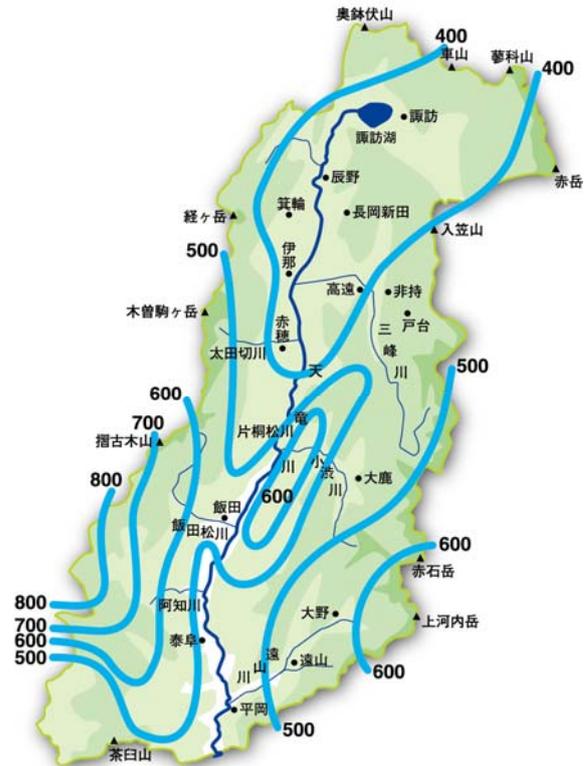


図 三六災害が発生した際の梅雨前線豪雨連続降雨量分布図（単位/mm）6/23～30
（出典：天竜川サイエンス）

3 三六災害の災害の特徴

3.1 河川の氾濫

河川の氾濫とは、川の水などが増して勢いよくあふれ出ることです。

三六災害のとき、天竜川では土石流などに運ばれた大量の土砂によって、河床が埋まっていき、川底が高くなりました。そこに、さらに大量の水が流れ込んだため、堤防からあふれ、堤外地に氾濫したのです。

たとえば、飯田市川路では、流れが少しゆるやかになる場所に大量の土砂が堆積しました。そのため、川の流れが大ききうねり、川の水は堤防を乗り越え、多くの家々や農耕地が水に浸かりました。

三六災害では、たとえば飯田市で、30mm を超える激しい雨が断続的に降り続けました。一般的には、時間雨量が 20mm を超え始めると、

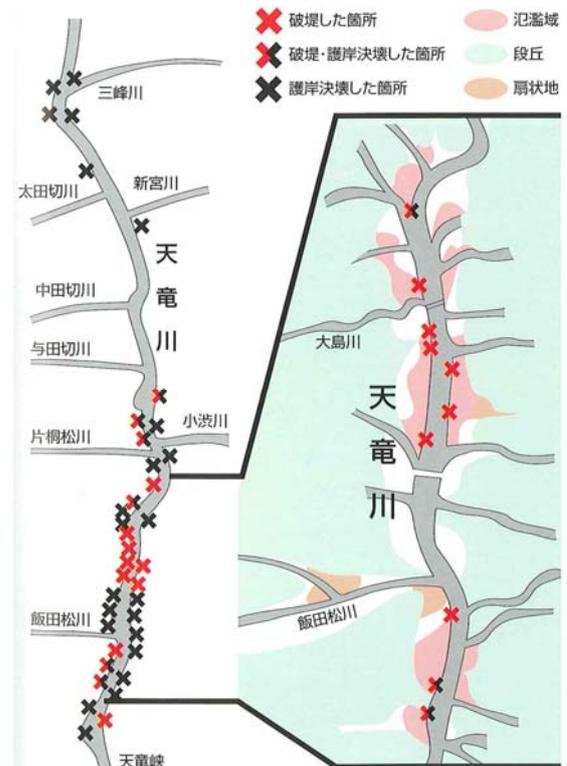


図 三六災害時の天竜川本川の被災箇所
（出典：天竜川サイエンス）

がけ崩れや土石流が発生する危険性が高くなります。そのため、三六災害では、各地で早い段階から、多くの災害が発生する警戒レベルに達していたと思われます。

3.2 土砂災害

土砂災害は、一般に、大きく「土石流」、「がけ崩れ」、「地すべり」の3つの類型に分けられます。三六災害の折には各地で土石流やがけ崩れが発生し、周囲の集落や農耕地に大被害をもたらしました。その数は伊那谷全体で1万箇所を越えたといわれます。

この土砂災害の結果、各所で道路網が寸断し、集落が孤立しました。水道や電気などのライフラインも止まり、主要な輸送網であった飯田線も大きな影響を受けたことから、食糧不足も深刻化するなど、人々の生活への影響も甚大なものとなりました。

例えば、三峰川の上流にあった芝平、奥浦、戸草（伊那市）、四徳（中川村）、北川（大鹿村）などでは、大量の土石流により集落ごと押し流され、集落ごと移転することになりました。

伊那谷では、たくさんの集落が扇状地の上に発達しています。扇状地とは、土砂などが山側を頂点として扇状に堆積した地形のことで、天竜川の兩岸を山に囲まれた伊那谷ではごく普通にみられる地形です。扇状地は、地形が平らで造成しやすく人が生活するには好都合です。

しかし、この扇状地を作っているのは砂や石です。その砂や石—これを礫（れき）といいます—を運んだのは、「土石流」に他なりません。造成している工事現場では、ゴロゴロとした石や岩がたくさん出ている様子を見ることがあります。これは、かつて、その場所で土石流が発生したことを物語っています。

すなわち、私たちは、土石流が発生した場所に家や道路を作っており、いわば、災害の跡地に生活しているのです。

したがって、伊那谷では、強い雨が降ってきたときには、早い段階から災害への警戒を強め、避難などの対応が重要と考えられます。



図 三六災害時の土砂災害分布図



図 大量の土石流により一夜でできた扇状地（飯田市伊賀良）
この土石流では、5名が死亡し、45戸の民家が押し流された。

●被害額の割合(円)

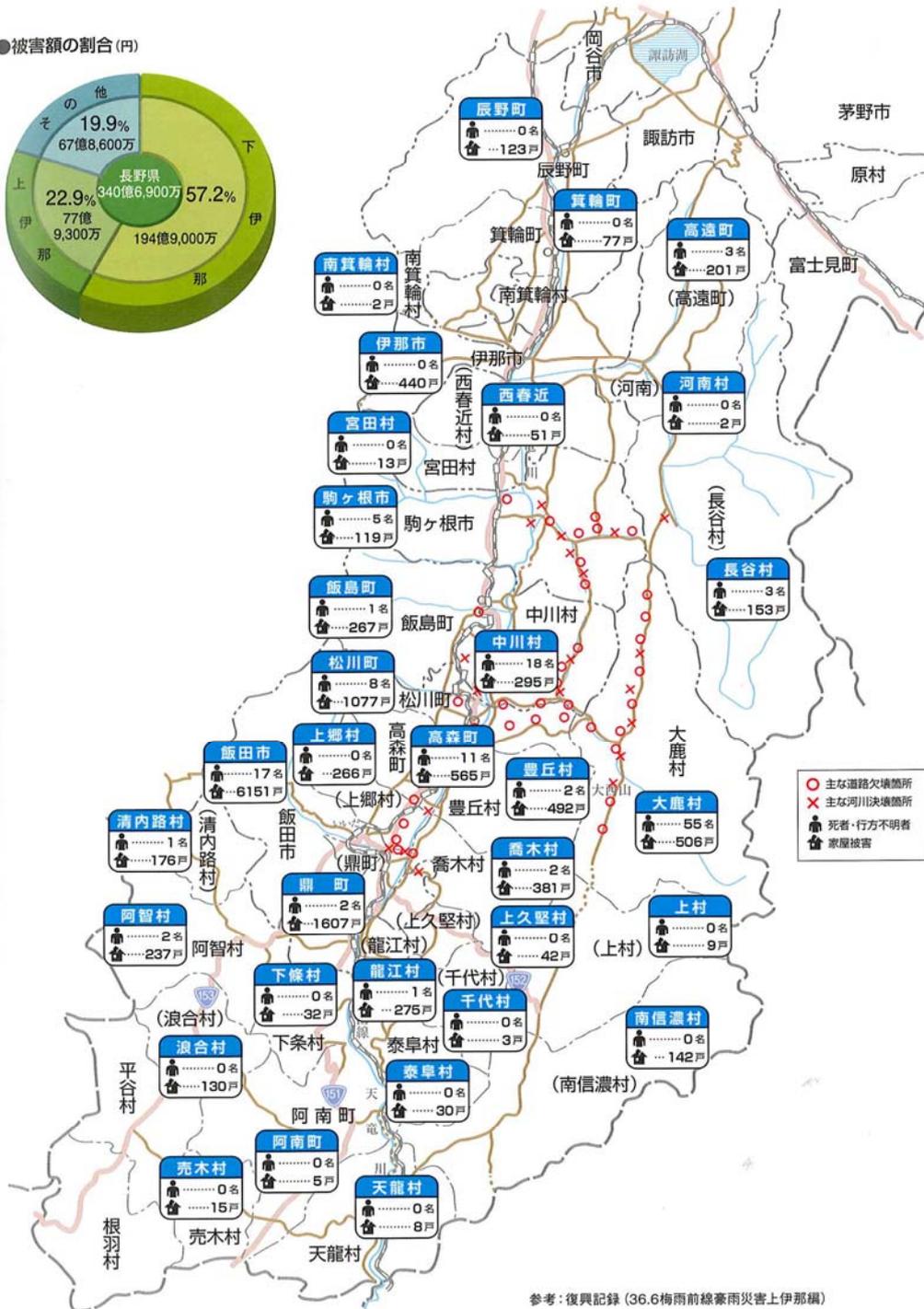
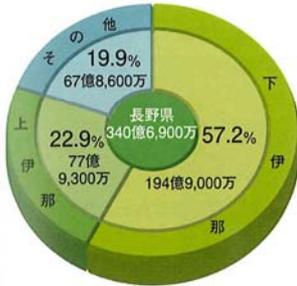


図 三六災害時の土砂災害分布図
(出典：想いおこす三六災害)